

## メモリアルルームと四時佳興

28期 永田尚之

11月3日、私は六本木高校の文化祭である「きらら祭」を見学した。今年から城南高校のメモリアルルームが、合わせて公開展示されることになったのだ。校内には生徒の父母たちも多数見学に来ており盛況だった。

帰りに正門そばにある「四時佳興」の碑石に立ち寄った。この碑石は江戸時代この地にあった内田豊後守の屋敷の庭に置かれていたもので、北宋の儒学者だった程顥の詩の一節を刻んだものだ。程顥は「理（天理）」を儒教の中心に据え、「仁とは万物一体なり」と唱えたことで朱子学だけでなくその対抗思想である陽明学の源流にもなった。

碑石に書いてある詩を書き写してみた。



秋 日 偶 成 程 顥  
閒 来 無 事 不 從 容  
睡 覺 東 窓 日 已 紅  
万 物 静 觀 皆 自 得  
四 時 佳 興 與 人 同  
後 畧

ゆつたりと静かに眺めてみると万物  
は皆それぞれに所を得ている。春の花  
秋の月と四季折々の移り変わりの面白  
さは、誰をも同じに楽しませてくれる  
という意です。



漢文の猪口先生から当時ミュンヘン五輪でバレーボールの金メダルを取った大先輩の松平監督の話は嫌というほど聞かされたが、碑石のことは聞いた覚えはない。私は自らを松下村塾長に見立て説教で授業を費やす猪口篤志先生が好きではなく、表に「諫書」と書いた抗議文を渡したこともある。昭和61年に亡くなっているが、現在放送中のNHKラジオ「漢詩をよむ（日本の漢詩）」のテキスト

では参考文献として先生の著作が並んでいる。先生の著書を見ると「秋日偶成」はさらに古い字体で書かれている（中国歴代漢詩選・右文書院・平成 21 年刊行）。碑石に刻まれている元の字はどのようであったのだろうか。

現代中国語は魯迅たちの努力で話し言葉を書き表す文字という観念を日本語から取り入れ、前置詞や助動詞を明確に記すことによって作られた新言語であり、文法が極めて淡い漢文とは別の言語だ。秦の始皇帝が漢字の使い方を統一することで支配域内の文書のやりとりが可能になったことを引き換えに漢文は話し言葉と乖離した。漢文を解読できるのは経典に精通した儒家など一部の知識人のみとなった。また文書のやり取りを正確に行うために新解釈や新造語を禁止され、あくまで古典の用例を踏まえることが漢文の宿命となった。

詩人は新しい表現を創ることが許されていた唯一の例外だった。

程顥が道教や仏教の汎神論を取り入れた、士大夫（読書階級）のための新儒教を編み出したことは、彼が優れた詩人であったことと無関係ではない。

メモリアルルームの窓から新築された中国大使館が見える。程顥のような士大夫たちが（特に文革で）絶滅したことが、現在の中国の姿勢に関係していると思えてならない。



「きらら祭」でメモリアルルームの窓から風景を観察し「四時佳興」の碑石に立ち寄ったことで、猪口先生を偲び今の中国のあり方にも考えを及ぼすことが出来た。皆さんも一度メモリアルルームや「四時佳興」を見学してみてくださいはどうか。



#### 主要参考文献

- 1) 朱子学と陽明学 島田虔次 岩波書店
- 2) この厄介な国、中国 岡田英弘 ワック